

会 議 報 告 書	
会 議 名	令和4年度第3回草津市社会教育委員会議
日 時	自 10時00分 令和5年2月7日(火) 至 11時30分
場 所	草津市役所8階 大会議室
出 席 者	委員：山口委員長、長橋副委員長、藤澤委員、内田委員、熊川委員 山元委員、澤村委員、矢野委員、中瀬委員、出呂町委員、武田委員、 福田委員 事務局：藤田教育長、増田部長、田中総括副部長 生涯学習課 上原課長、廣政課長補佐、井上主任 傍 聴 人：0名
会議関係書類	<input checked="" type="checkbox"/> 有（別添のとおり） <input type="checkbox"/> 無

1. ≪教育長挨拶≫

2. 議事

1) 前回の会議について

資料1により事務局から説明

2) 令和4年度読書ボランティア人材養成講座について

資料2により事務局から説明

A 委員)

養成講座の2回目を受講したが、子どもに読み聞かせをしてみたい、もっと子どもと関わってみたいという思いが強くなった。学生も誘いながら参加者が増えていくと、よい活動になっていくと感じた。

B 委員)

このボランティア人材養成講座を地域に広く広報していくことが課題。地域のまちづくり協議会も情報誌やホームページを持っていて、情報発信を行っているが、市の事業とも方向性を合わせていくことが大切で、高齢者や子どもたちにも十分に知らせていきたい。

委員長)

市民の皆さんに「関心を向けていただく広報」と「参加を促す広報」に分けられるという御指摘と受け止めた。講座の認知が広がれば「自分は参加しないけど、こういう講座・活動がある」と地域の中でお声かけをいただいて、間接的に参加層が広がることもあり得る。まずは情報を届ける、そこから関心がつながる、そうして二段階で働きかけがなされることもあるという示唆として受け取めたい。

事務局)

センターへのチラシの設置などでは御協力をいただいたが、まちづくり協議会に向けた案内は不足していたと思うので、今後は広く案内をしていきたい。また、養成講座の関係だと、受講生の受け皿を広げていく意味からも地域の団体のリストアップを行い、受講生に提供することも検討しており、そのような形の情報提供・共有も行っていきたいと考えている。

委員長)

まちづくりセンターやまちづくり協議会の仕組みが活用され、情報を届ける側と受け取る側の双方向でやり取りがなされることを期待したい。

C 委員)

読み聞かせのワークショップに参加した。すごく熱心な指導でこういう機会が増えると良いと感じた。ボランティアを増やしていくことやボランティアがやりがいを持って活動できる環境を整えていくということをいつも考えているが、ボランティアの定義が人によって異なる点も課題であると感じている。自分の活動としてボランティアの募集をすることもあるが、ボランティアとして関わりたい方から「交通費はでるか」「ボランティア保険はあるか」「学生だが単位は出るか」など様々な質問がある。受け入れる側の情報開示も大切であるが、少し“遊び”の部分がないとお互いに上手くいかないこともあるし、なによりミスマッチが一番いけない。そんなことを日々感じている。少し話が変わるが、まちづくりセンターの職員募集の記事の中に「ボランティア精神がある方」という記載があって、友人が「これってサービス残業が多いってことだね」と言った。この話は「ボランティア」という言葉の定義が様々であるということを象徴していると思っていて、草津市でのボランティアはこういうものだというのを提示して、事業を進めるほうがよいのではないかと。

B 委員)

まちづくり協議会の活動でも、ボランティア保険の問題や有償ボランティア・無償ボランティアの問題は常に感じている。まちづくり協議会への交付金も活用しながら対応しているが、根本的に本当に難しい問題である。

委員長)

まちづくりや福祉の分野では、ボランティア精神という言葉が象徴するように、事業や施策の担い手

やその意義が個人の資質の問題として扱われることがある。行政が実施する講座の話に引きつけてみると、講座開催までが行政の役割で、その後は各々の行動に任せて良いのかという問題提起だととらえている。つまり、個人の精神や資質に依存せず、地域の文化・風土に合った活動の環境はどのようにして整うかが課題となる。草津市での読書ボランティア人材養成講座に引きつけると、講座を修了された方々が活躍できる場をどう整えるか、ということになる。これは生涯学習課だけでなく、全庁的な連携と現場との協働が不可欠になってくる。

3) 玉川小学校での活動について(委員報告)

資料3によりD委員から報告

D委員から報告

・元々本が好きではなかったが、子育てを通じて絵本の楽しさを知り、好きな本で何か人の役に立てたらと読書ボランティア人材養成講座を受講した。

・養成講座受講後、玉川小学校でいろいろな方に声をかけて、コロナ禍で途絶えていた子ども達への読み聞かせを昨年の12月から開始することができた。

・どれだけ子ども達が集まるか不安だったが、毎回20名くらい参加があり、この前は最前列に座った子どもが「楽しみ！」と言ってきて、本当にやってみてよかったと思った。

・養成講座を受けたときは、やりたいと思っても実際に行動する熱意や勇気はなかったが、養成講座で知り合えた方の活動を見学したり、アドバイスをもらいながら、実際に行動する気力が湧いてきた。

LINEを活用して、読み聞かせのボランティアを募った。気軽に見れて、気軽に発信できるツールは仲間を増やしていくためにとても大切。

・ボランティアとして活動を続けていくためには、活動の楽しさを知り、自信を付けることが大切であることを実感している。

・講座を受講するだけでなく、実際にやってみる場づくりや、相談できる仲間づくりが大切。

4) 活動を始めていくために必要なものについて

資料4により事務局から説明

副委員長)

D委員のお話も踏まえて、人材を養成していく上で2点大切なことがあると思っている。一つ目は、勇気・自信・楽しさをどうやって芽生えさせて、維持していくかという点。例えば読書ボランティアの養成の中で考えると、誰に読み聞かせるかが大切で、未就園児や小学校高学年以上の子どもたちだと、やや反応が薄くて、手ごたえがないかもしれないので、小学校低学年の子どもたちを相手にしたほうが良い反応で、読み聞かせたという実感がわきやすいのかもしれない。二点目は、活動を継続して行う仕組みづくりが大切という点で、ニーズがあるところに人材をうまくマッチングさせて、継続した活動にボランティアが関わっていけると、その人の成長にも繋がっていく。

E 委員)

C 委員の意見でもあったが、ボランティアの定義や考え方について、市社会福祉協議会やコミュニティ事業団もボランティアに関わる業務を担われているが、それぞれどう考えているか見えにくい部分もあるので、公共的な団体で考え方のすり合わせも大事なのかなと感じた。

私もいわゆる「ボランティア精神の高い方」のような形でボランティアを募っていくのは、今の時代にそぐわないと思っているし、まずは楽しむというところを一番大事にしたいと考えている。例えば子どもたちの読書離れを何とかしたい！といったように課題解決型でのボランティアをしようとしてもなかなか続かない。もちろん解決すべき課題を考えて行動することは大事だが、楽しみながら活動していると、結果として課題が解決していました、という形の方が良いと思っている。

また、場づくり、仲間づくりという点で、居場所づくりとして、地域居酒屋や昼間のランチ、子ども食堂をNPOの活動として行っているが、地域居酒屋・昼間のランチで仲良くなった人が子ども食堂を手伝ってくれたりすることもある。資料4の場づくり・仲間づくりは単発で考えるのではなくて、連動させていくことが大事。

委員長)

資料4については、講座を契機として場づくりと仲間づくりが一方通行の矢印で表現されているが、実際は複合的・流動的で、「場づくり」から入ってくる人もいる。ひともまちも常に動いており、流れを固定的に考えず、多様な担い手がいるという現場からの生の声として受け止める。

F 委員)

小学校の図書ボランティアとして長く活動している。D 委員からもいろいろと相談を受けていたが、努力が実り、活動に繋がり、ほんとうに素晴らしいと思った。私も個人として読書ボランティアの活動をしているが、受け皿をつくるため、団体としての活動も始めた。市と連携しながら養成講座の受講生といろいろなところで読み聞かせをしていきたいと思っている。社会教育委員の活動にも参加できればと思っているのでよろしくお願いします。

B 委員)

D 委員の発表に LINE を活用したという発言があったが、まちづくり協議会の活動でも活用している。このようなツールを効果的に使っていくことが大事。

G 委員)

学校の図書館は、学習する場所だけでなく、居場所になったり、休み時間に落ち着ける場所であったり、子ども達にとっても大切な場所。私の中学校でも、地域の読み聞かせサークルの方に来ていただいて、昔話の紙芝居を子どもたちに読み聞かせてもらった。学校としても、コロナ禍でまだまだ難しい部分もあるが、いろいろな情報を仕入れて、地域との繋がりを深めていければ良いと考えている。

C 委員)

未就学児向けの読み聞かせをやっているが、たしかに反応は薄い。でも、お話し会をすると人は集まってきていて、きっと保護者の方はその空間で癒しを得ているのだと思う。講座の中でも、この年代の子ども達は反応が薄いか、例えば、高学年の子ども達の反応は薄いかもしいないけど、いつも騒いでいる子どもたちが静かに読み聞かせを聴いていることはすごいことなんだと、教えていければ、現場での戸惑いも減ると思う。

H 委員)

老上学区のまちづくりセンターで中学校の美術部と連携して、昔のお話から物語を考えて自分達で紙芝居をつくるという事業をおこなっている。そういう地域の事業とも関わっていくと良いと思う。

I 委員)

子どもと関わる活動をしているが、活動の原動力は、子ども達の笑顔や楽しいという声。加えて、一緒に活動する仲間の存在である。一緒に活動する仲間からフィードバックで活動がさらに良いもの、さらに楽しいものになっていくし、そんな相互作用のなかで良い連鎖を作り出していけると、活動の継続性も高まるのではないかな。

委員長)

子ども達との活動に限らず、する／される、教える／教わるといった関係ではなく、お互いが良い影響を与え合う関係性があるからこそ、学びや成長がもたらされる。E 委員の御意見にあった課題解決型の活動では「する」側の主張や思いが先行するという指摘とも繋がる話である。読み聞かせという表現が用いられているが、読む／聞くという関係性でないことを確認しておきたい。

J 委員)

ボランティアの募集やボランティアの養成講座の開催はよくされているが、ボランティア団体の活動の周知が不十分であると感じている。活動が周知され、いろいろな人から認知されることで、「この前頑張っていたね！すごいね！」と声をかけられるなど、ボランティアの方の自信や、モチベーションに繋がっていくと思う。

A 委員)

講座から場づくり、仲間づくりが連携していくことが大切で、場づくり・仲間づくりが広がっていくためには情報発信が大切になってくる。

委員長)

今日は「丁寧に活動しよう」「仲間を大切にしよう」「何かを目指すのではなく共に時間を過ごすことが大事」と、社会教育や生涯学習の上で重視される人格形成の根幹にかかる御意見を多方面から

いただいた。PDCA サイクルという言葉があるが、学びと成長の場づくりでは、全てが計画通りにいけば良いというわけではない。むしろ計画通りにいかなかった結果、新たな波及効果が出てくることもあり得る。今回は、資料4を手がかりに活動を始めるために何が必要かについて特に御意見をいただいたが、むしろ何をしないか・何をすべきではないか、も考える機会ともなった。

副委員長)

行政の役割分担を考えると、自転車で例えると補助輪みたいなものだと思う。補助輪は、補助輪を付けて自転車に乗るためのものではなく、補助輪を外して一人で走れるようになるためにあるもので、ボランティアとの関わりにおいても、ずっと支援を続けるのではなく、例えば最初の場合づくりやマッチングは用意をして、ゆくゆくは自立した活動を目指してもらう必要がある。そのためには、LINEなどのツールも活用しながら、気楽に、楽しく参加できる場・仲間をつくることが大切になってくる。

3. 報告事項

2月21日(火)開催の学びの地域支援講座についてお知らせ

以上